

K-619

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第8集

市内遺跡発掘調査報告書(1)

愛宕山館の調査
館之越遺跡の調査
飯沢館の調査他

1993年

長井市教育委員会

市内遺跡発掘調査報告書

1993年

長井市教育委員会

序

昨年度に引き続き、市内に係る遺跡発掘調査報告書がここにまとめ上げされました。ご協力いただきました多くの方々に心からお礼を申し上げます。

本調査を進めるに当たりましては、山形県教育庁文化課のご指導を始め、地元の致芳史談会、西根史談会、豊田地区公民館、豊田地区文化振興会の方々には、特に細部にわたりご面倒をいただきましたこと、誠に有難く存じております。

中でも調査主任として直接指揮をとって下さいました佐藤正四郎先生には、そのご労苦とご努力に対しまして全く頭の下がる思いであります。この3月22日に他界なされましたか、これまでの数々のご業績を省み仰ぐとき、本当に惜しい方を失ったものだとつくづく感じております。考古学や埋蔵文化財に関しましては、本市においてのみならず県下に指導力を發揮していただいておりました方でありますので、私達にとりましては本当に大きなショックでした。今はただご冥福を心からお祈りし、このあと皆さんと共にご遺志の何分の一でも前進させなければならないと思います。

本報告書は昭和57年（1982）より続いてきている遺跡詳細分布調査の各報告書と参照されながらご覧いただくとなお明らかにお分かりいただけるものと存じますが、近年開発事業の進展と共に急いで調査しなければならない事態なども起こったりして、直接ご尽力下さいました皆さんには難儀の多かった数多い貴重な資料の1つとなりました。

職務や研究の上で特にご関心のある方は勿論ですが、改めて本市の昔に思いを寄せられる方々にも、本誌を大いに活用していただければと心から念願するものであります。

平成5年3月

長井市教育委員会

教育長 鈴木泰助

例　　言

1 本報告書は、長井市教育委員会が国庫補助を受けて実施した平成4年度以降開発事業との調整並びに遺跡台帳整備に関する市内遺跡発掘調査報告書である。

2 事業期間は平成4年5月10日から平成5年3月31日までである。

3 調査体制は次のとおりである。

調査主任 佐藤正四郎（米沢女子短大講師）

調査員 岩崎 義信（長井市教育委員会生涯教育課文化係長）

調査補助員 高橋しのぶ（　　　　　〃　　　　　主事）

調査参加者 飯沢一男、飯沢嘉太郎、飯沢長吉、飯沢芳雄、石塚伊助、梅津庄一、
梅津幸男、小笠原源吉、片桐義正、金子勝次、小林二雄、小松慎一、
佐々木嘉太郎、渋谷 実、渋谷勇二、鈴木忠助、寺鳴孝吉、寺島円蔵、
平田和夫、日黒善次郎、松木 崇、山平直美、横山吉次、渡部金六

事務局長 竹田 欣助（長井市教育委員会生涯教育課長）

事務局次長 沼澤久四郎（　　　　　〃　　　　　次長）

事務局員 岩崎 義信（　　　　　〃　　　　　文化係長）

高橋しのぶ（　　　　　〃　　　　　主事）

4 本調査にあたっては、次の方々にご指導・ご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

山形県教育庁文化課、致方地区史談会、豊田地区公民館、豊田地区文化振興会、西根史談会

5 採図・付図の縮尺はスケールで示した。

6 本書の編集・執筆は岩崎義信が担当し、採図・図版等の作成は色摩ハル子・福田和子の補助を得た。また、これまでご指導をいただいた佐藤正四郎先生が3月22日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

目 次

I 調査に至るまで	1
1 調査の目的	1
2 調査の方法	1
3 調査の経過	2
II 調査の概要	3
1 外川前遺跡	3
2 愛宕山館	5
3 界斎遺跡	17
4 飯沢館	19
5 大林遺跡	21
6 館之越遺跡	23
7 源徳原館	31
8 時庭館	35

挿図目次

第1図 外川前遺跡概要図	3
第2図 愛宕山館位置図	5
第3図 愛宕山館概要図	6
第4図 愛宕山館縄張図	8
第5図 愛宕山館1トレントレンチ土層セクション図	11
第6図 愛宕山館2トレントレンチ土層セクション図	13
第7図 愛宕山館3トレントレンチ土層セクション図	15
第8図 界斎遺跡概要図	17
第9図 飯沢館概要図	19
第10図 大林遺跡概要図	21

第11図 館之越遺跡概要図 1	23
第12図 館之越遺跡概要図 2	24
第13図 館之越遺跡土器拓影図 1	25
第14図 館之越遺跡土器拓影図 2	26
第15図 源徳原館位置図	31
第16図 源徳原館概要図	32
第17図 時庭館位置図	35
第18図 時庭館概要図	36

図 版 目 次

図版 1 外川前遺跡	4
図版 2 愛宕山館	7
図版 3 愛宕山館近景	10
図版 4 愛宕山館土層断面図	12
図版 5 愛宕山館土層断面図	14
図版 6 愛宕山館土層新面図	16
図版 7 界齋遺跡	18
図版 8 飯沢館	20
図版 9 大林遺跡	22
図版10 館之越遺跡	24
図版11 館之越遺跡	27
図版12 館之越遺跡	28
図版13 館之越遺跡出土遺物	29
図版14 館之越遺跡出土遺物	30
図版15 源徳原館	34
図版16 時庭館	38

I 調査に至るまで

1 調査の目的

本市では昭和57年から行った遺跡詳細分布調査を発端に、市内全域にわたる分布調査を実施してきたところ約200箇所の遺跡を把握した。しかし近年時代の要求に伴い、遺跡が存在する地域にも開発がおよぶようになってきた。そのため開発事業と調整を図り、事前に遺跡の保護にあたることを目的にした調査である。

また、周知の遺跡は表面踏査で確認したものがほとんどであるため、遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにするために試掘調査を行い、遺跡台帳の整備にあたった。

2 調査の方法

(1) 現地踏査

遺跡として登録されていない地域でも、事業実施区域が広範囲におよぶ場合は現地踏査を実施し遺跡の有無を確認し、開発事業計画と遺跡保護の調整にあたった。

(2) 試掘調査

周知の遺跡が事業実施区域に含まれる場合や、周知の遺跡周辺に開発がおよぶ場合には坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺構・遺物の広がりを確認し、さらに遺構検出面までの深さを把握し開発事業計画と遺跡保護の調整を図った。

また、遺跡台帳を整備する目的から、これまで表面踏査から推定した遺跡について坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺跡内容の補筆にあたった。

(3) 測量調査

中世の館跡など現況に遺構の形態が現れている遺跡を対象に測量調査を行い、開発事業計画と遺跡保護の調整にあたると同時に、遺跡台帳の整備の目的から測量調査を行い遺跡内容の補筆にあたった。

3 調査の経過

長井市教育委員会ではこれまで実施してきた分布調査から遺跡地図を作成した。この地図を開発を担当する関係機関に配布し、今後計画されている開発事業にさきがけて埋蔵文化財に係るヒアリングを実施している。その結果を受けて、開発事業との調整を図るために必要に応じ上記の調査を実施した。

なお、ヒアリングと調査の内訳は次のとおりであり、現地調査の行程は表1のとおりである。

調査に至るまで

埋蔵文化財ヒアリングに係る調査一覧表

事業種別	遺跡名	調査区分	備考
大規模造成事業に係るもの	外川前遺跡	試掘調査	
"	愛宕山館	表面踏査 試掘調査	縄張図作成
"	界齋遺跡	試掘調査	
道路建設に係るもの	飯沢館	試掘調査	
"	館之越遺跡	試掘調査	
遺跡台帳整備に係るもの	大林遺跡	試掘調査	
	時庭館	表面踏査	縄張図作成
	源徳原館	表面踏査	縄張図作成

調査工程表

	平成4年 11月	12月	平成5年 1月	2月	3月
現地踏査					
試掘調査					
報告書作成					

II 調査の概要

1 外川前遺跡

最上川右岸、日の出町地区南端の河岸段丘上に位置する。昭和63年に確認された遺跡で、戦時中は射的場になっていたという。戦後開墾が行われた折り、土中より瓶が出土したと伝えられているが、詳細は明かでない。現在は背後の丘陵を切り崩して造成した畑地となっている。

この度、当地域に大規模造成が計画されたため、事業計画との調整を図る目的で試掘調査を実施した。

周知遺跡範囲の中央部に 1×1 m のテストピットを 10m 間隔で 6 個所設定し、遺構・遺物の検出につとめながら地山まで掘り下げた。

調査の結果、テストピットの土層堆積に規則性が見られず、地山層の堆積が混じっている。また、遺物の出土も見られないことから、本遺跡は開墾や長年の耕作で擾乱が著しいことが明かになった。



第1図 外川前遺跡概要図



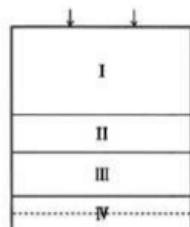
遺跡遠景 (北から)



調査風景



T.P. 2 土層断面



T.P. I 土層柱状図

図版1 外川前遺跡

調査の概要

2 愛宕山館

最上川の右岸、出羽丘陵の南端部、通称東山に位置する。遺跡は昭和63年に確認された。館跡は愛宕山の山頂を中心に、周囲の尾根に沿って廓や堀切りが築かれている。館跡の中心と考えられる箇所は現在神社が祭られており、近くに国土地理院の三角点がある。

この度の調査は、外川前遺跡から愛宕山の裾野一帯に大規模造成が計画されたため、事業計画との調整を図る目的で調査を実施した。本遺跡は広範囲におよぶ山館のため、事業計画に含まれる地域を調査範囲とした。

現地踏査を行ったところ、愛宕山から最上川に向かって張り出した尾根には、堀切りやテラス状の遺構が4箇所、山道に沿って幅9mにおよぶ土手と空堀が長さ120mにわたり築かれていた（第4図）。そこで遺構の性格を明らかにするために、1×10mのトレンチを3箇所設定し地山まで掘り下げた。

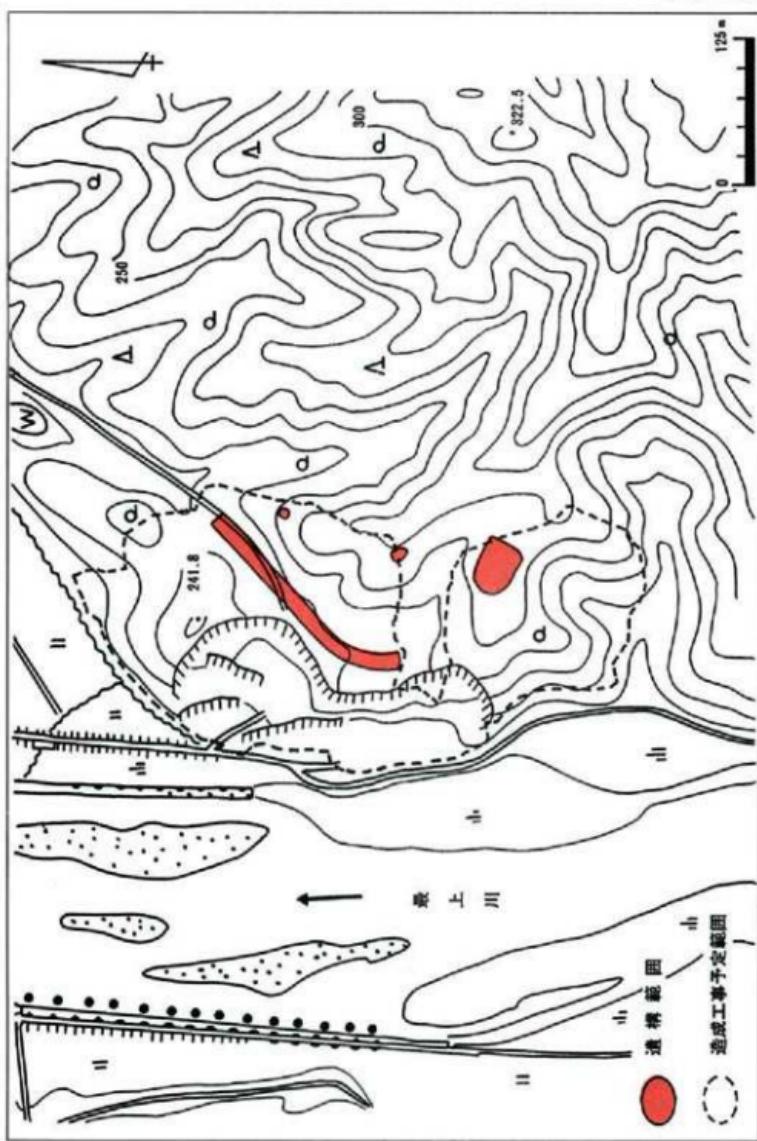
調査の結果、遺物の出土は無かったものの、1～3のトレンチでは粘質土で固めるなどいずれも人工的な土層堆積が認められた。

1トレンチでは立木の関係で断続的な断面図実測になったが、現況でも土手と空堀の痕跡が明瞭に認められる。土層セクション図右側（第5図）では水平な土層堆積がみとめられ、粘質の褐色土に砂をませた土質が交互に叩き締められた状態で「版築」と考えられる。



第2図 愛宕山館位置図

第3図 愛宕山館概要図



調査の概要

土層セクション図中央部（第5図）では、⑥⑦⑩⑪⑫⑬の土層は砂質性（川砂状）に富み水性植物の茎や根を多量に含むのに対し、⑧⑨⑭～⑯の土層は粘性を帯びる土質となる。このことから前者（砂質土）は堀底で後者（粘質土）は土手と考えられる。土層セクション図左側（第5図）は②の土層（この山の表土層）の上に①の土質が堆積しており、盛土の可能性がある。

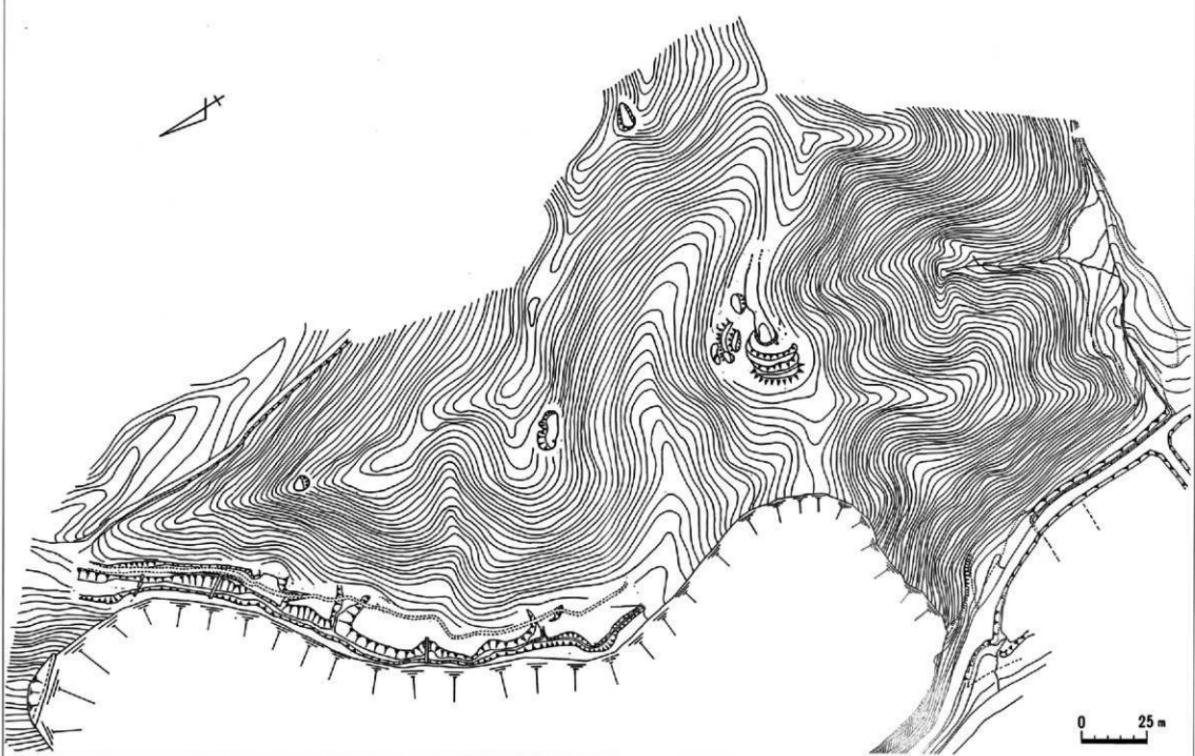
2トレンチでも土手と空堀跡が明瞭に認められる。1トレンチのように水性植物の茎や根はみられないものの、最上川右岸地域の河川の川底で顕著に見られる金雲母が多量に含まれること、土手の急斜面には褐色系の粘質土（⑭～⑯）を敷きつめていること、旧表土の上に盛土が見られることなど（第6図）から1トレンチ同様、前者は堀底で後者は土手と考えられる。

3トレンチは1・2トレンチほど堀跡の落込みが明瞭ではないが、土手の斜面に粘質土を敷きつめており、セクション図中央部に落込みが確認できることから、土手と堀の存在が考えられる。

以上のことからこれらの遺構は土塁と堀跡と考えられる。さらに1トレンチでは水性質物の茎や根が、2トレンチでは河川の川底に見られる金雲母が顕著に見られること、トレンチの堀跡は湧水で水浸しの状態にあったことから、堀には水が流れ込んでいた可能性もある。ともあれ愛宕山館の範囲は第2図のように広がることとなった。



図版2 愛宕山館遠景



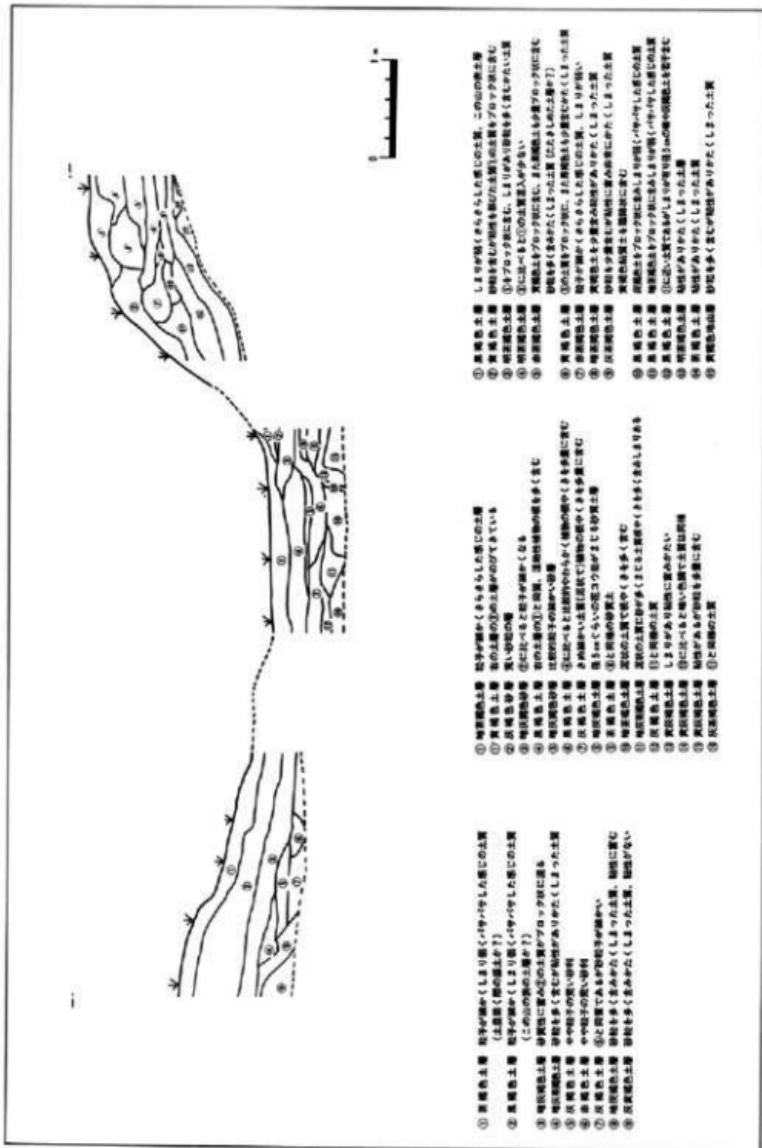
第4図 愛宕山館構造図



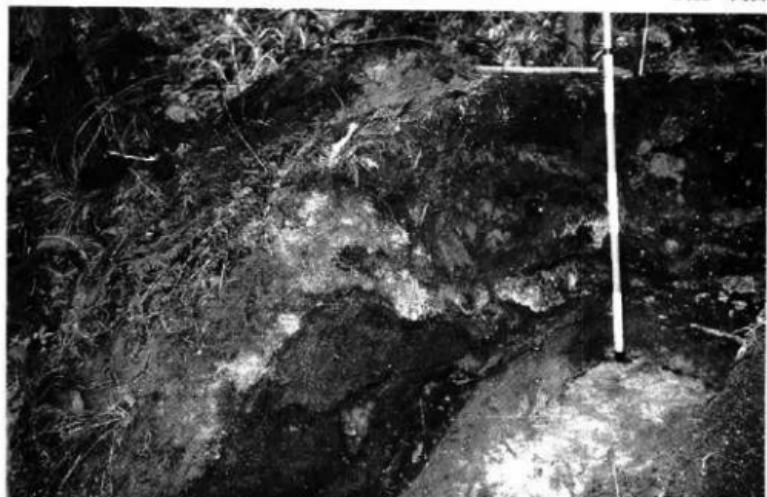
蒂 邱 (北から)



蒂 邱 (東から)



第三回 袁公見山靈



I. トレンチ 土壌版榮状況(西から)



I. トレンチ (西から)

調査の概要

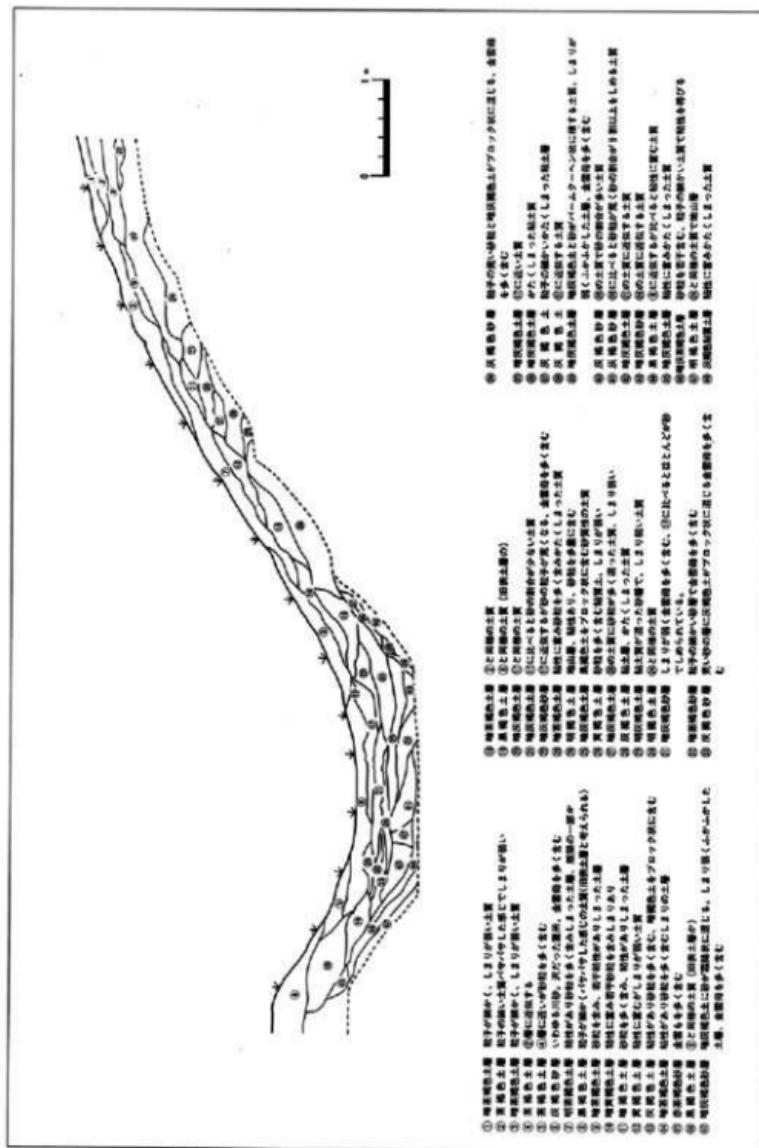


図6 愛宕山越 2トレンチ 土層セクション図



2. トレンチ (南から)



2. トレンチ (南から)

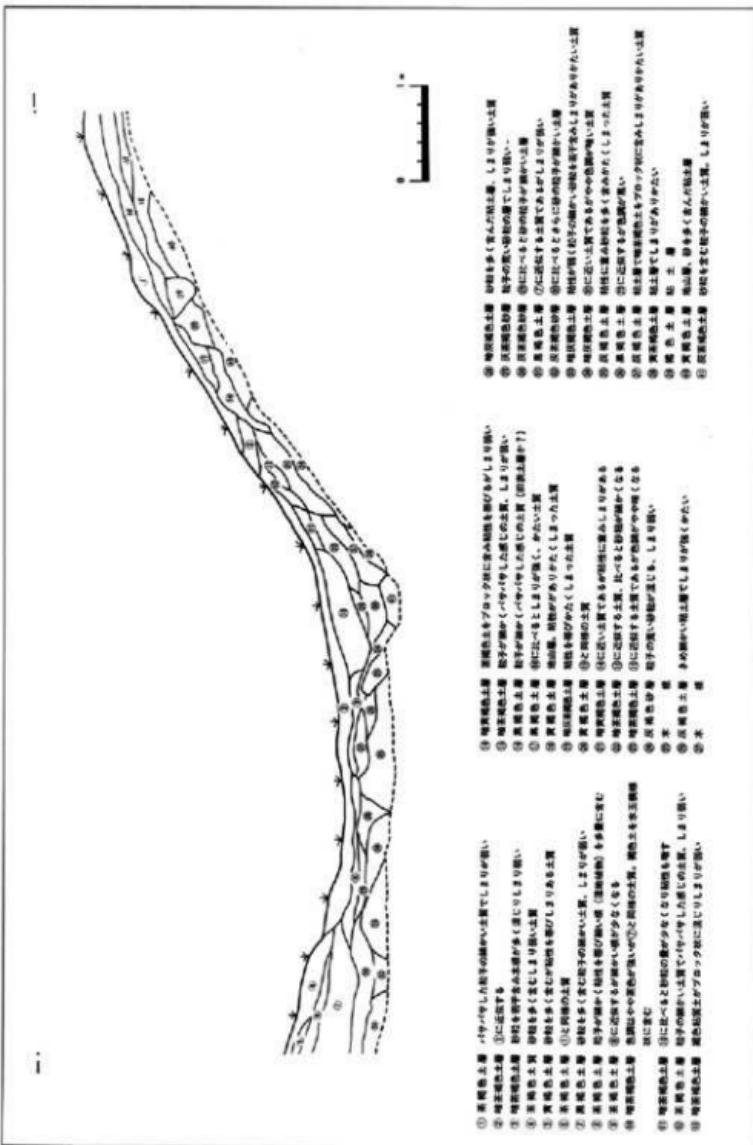


図7-3 土層セクション図 (山宮愛) レンタル3



3. トレンチ (東から)



3. トレンチ (南から)

調査の概要 -

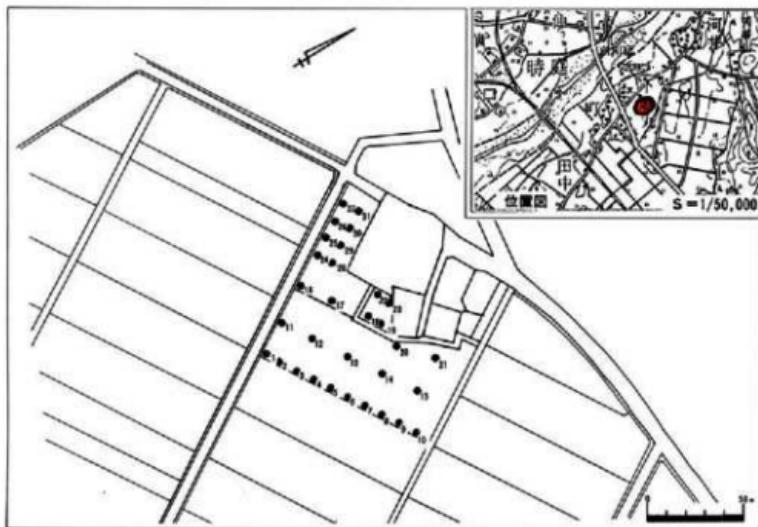
3 界齋遺跡

白川の右岸、国道287号線に沿いに立地する。周辺には古屋敷遺跡をはじめ、河井山古墳群・茶臼館・今泉金山遺跡・蛇崩遺跡・加賀塚遺跡・今泉館跡・源徳原館跡ほか多くの遺跡が点在する。界隈遺跡は平成3年の分布調査で発見された绳文時代の遺跡であるが、平地における同時代の遺跡は数が限られている。

この度、本遺跡の東側に児童館造成が計画されたため、事業計画との調整を図る目的で調査を実施した。

現在、界齋遺跡と開発事業計画区域の間には国道287号線が通って両者が分断した状況になっているが、児童館造成区域には帯状の高まりを呈した台地が存在したという。そのため界齋遺跡の範囲が東に広がる可能性もあるため、 1×1 mのテストピットを10~20m間隔に設定し、遺構・遺物の検出につとめながら地山まで掘り下げた。

調査の結果、昭和40年代に土地改良が行われたが、地山層までが深い箇所(TP 1~23)は下層まで擾乱がおよんでいないものの遺物・遺構は検出されなかった。また、帯状の台地の高まりを呈した箇所は地山層までが浅いため、擾乱を受けており遺構・遺物は確認されなかった。



第8圖 界齋遺跡概要圖



遺跡遠景（南から）



TP 13 土層断面

I	
II	
III	
IV	

TP 12 土層柱状図



TP 28 土層断面

I	
II	
III	
IV	
V	
VI	

TP 28 土層柱状図

図版7 界隈遺跡

調査の概要

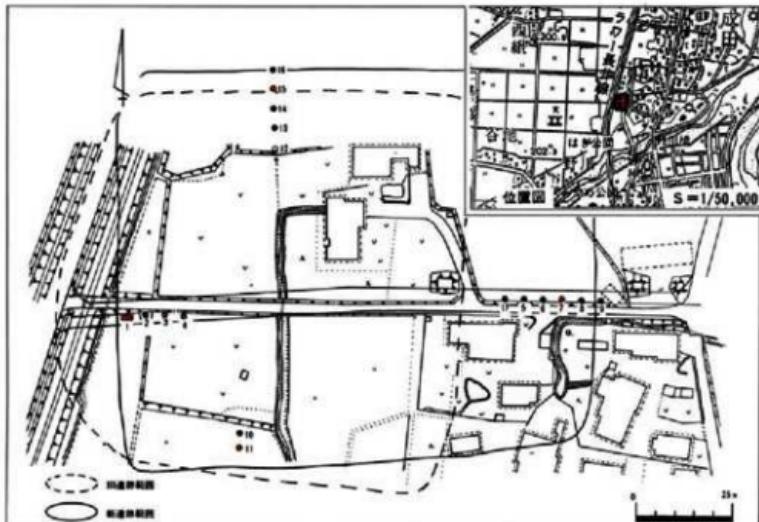
4 飯沢館

置賜野川の左岸、山形鉄道フラー長井線沿いの河岸段丘上に位置する。本遺跡の周辺には成田館・飯沢北館等中世の館跡をはじめ縄文時代の遺跡も点在する。これらの遺跡は平成元年度の分布調査で発見されたもので、現在は宅地・畠地・水田・道路・鉄道敷地となっている。

この度、遺跡の中央部を通る市道の拡幅が計画されたため、遺跡範囲の確認と調査経費積算の目的で試掘調査を実施した。

遺跡範囲については土壌も現存し、またこれまで明治時代の地籍図や聞き取り調査からおおよその範囲を捉えることができたため、東西南北それぞれの推定線に沿って1~3m×1mのテストピット17箇所を設定し地山層まで掘り下げた。

調査の結果、1・7・11・15のテストピットからは多量の水性植物の茎や根が出土したことや、堆積土が他と比べると軟らかく泥炭化しており、堀跡と考えられる。また、3・4のテストピットからは遺構が検出されたほか、12からは縄文土器片が出土したことから、本遺跡は戦国時代の館跡と縄文時代の包蔵地である。したがって、遺跡範囲は当初予想したよりも東に30m広がり東西120m南北100mと考えられる。



第9図 飯沢館概要図



遺跡遠景（北から）



土壘近景（南から）



TP I 土層断面



TP 12 出土遺物

I	耕作土 15cm
II	灰茶褐色土 30cm
III	暗灰褐色土 10cm
IV	灰褐色砂質土 10cm

TP 12 土層柱状図

調査の概要

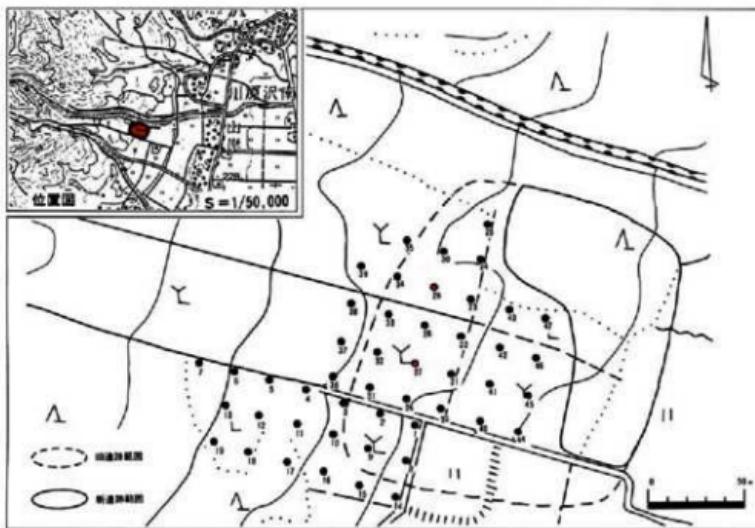
5 大林遺跡

朝日山系のふもと通称西山山ろくには旧石器時代から戦国時代に至るまで数多くの遺跡が点在し、大林遺跡もそのなかのひとつで昭和57年に行った分布調査で発見されたものである。遺跡は水無川によって形成された扇状地の扇央部に位置し、現在は桑畠・畑地となっている。

この度の調査は、遺跡台帳の整備にあたり遺跡範囲を確認すること目的にした試掘調査である。

昭和57年の表面踏査で遺物を採集した地点を中心に試掘を行うとともに、遺跡の立地条件を備えた箇所についても試掘を行った。すなわち、 $1 \times 1\text{ m}$ のテストピットをおおむね 20m 間隔に設定し、遺物・遺構の検出につとめながら地山まで掘り下げた。

調査の結果、遺物の出土は見られず、27・29のテストピットで遺構を確認したにすぎなかった。また、遺跡中央部では地山層までの堆積土が浅いのに対し、南と北側では堆積土が異常に多く、地点によっては地山層が混じり込んでおり、大規模な開墾が行われた可能性がある。したがって本遺跡の西半分は開発による搅乱が著しいため、遺跡範囲は東側の一部に限られることとなった。



第10図 大林遺跡概要図



遺跡遠景(南東から)



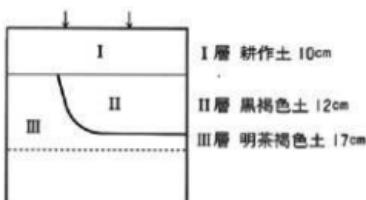
遺跡遠景(東から)



TP 27 土層断面



TP 11 土層柱状図



TP 27 土層柱状図

図版9 大林遺跡

調査の概要

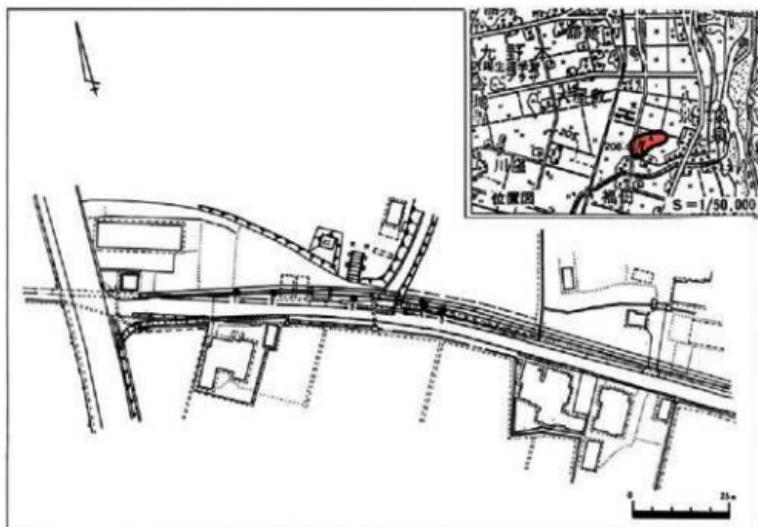
6 館之越遺跡

国道287号線と山形鉄道フラー長井線の中間地点に位置する。遺跡は平坦地のなかの残丘上にあり、昭和45・46年に一部緊急発掘調査が行われ縄文中期の集落跡（大木7a～8b期）が見つかった。現在寺・墓地・畑地・果樹園となっている。

この度、遺跡南側の道路拡幅が計画されたため、開発事業との調整を図るとともに遺跡範囲の確認を目的とした試掘調査である。

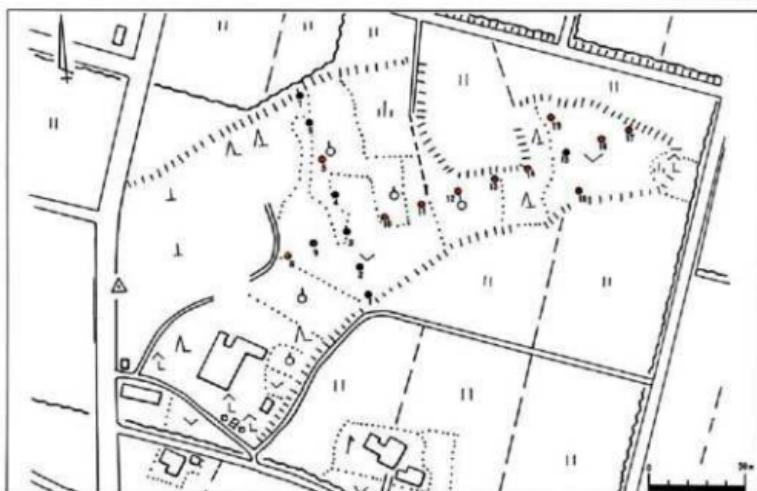
道路拡幅工事が遺跡におよぼす影響を見るために、 $1 \times 1\text{ m}$ のテストピットを5箇所（第11図）設定し地山層まで掘り下げたが、遺物・遺構は検出されなかった。しかし、遺跡の範囲を調べるために $1 \times 1\text{ m}$ のテストピットを19箇所設定し地山層まで掘り下げたところ2・6・7・10・16を除くテストピットで遺物・遺構を検出した（第13・14図、図版11～14図）。また、地山層までの土層堆積も著しい変化は認められず、擾乱も見られないことから遺跡の保存状況はきわめて良好であるといえる。

したがって、遺跡範囲は台形状を呈した高台に集中しており、道路拡幅が計画された箇所にはおよばないことが判明した。



第11図 館之越遺跡概要図1

調査の概要



第12図 館之越遺跡概要図2



TP 3 土層断面



TP 8 土層断面

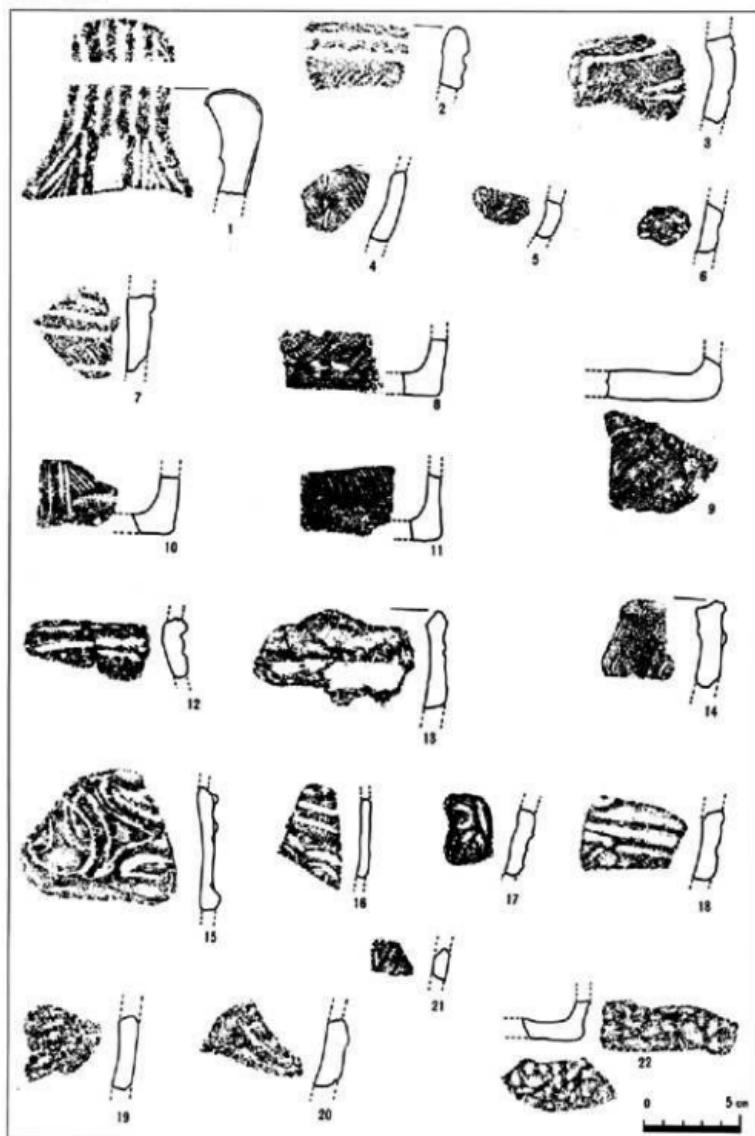
I	I層 寒土 20cm
I	II層 茶褐色土 10cm
III	III層 黑褐色土 35cm
IV	IV層 嗜茶褐色土

TP 3 土層柱状図

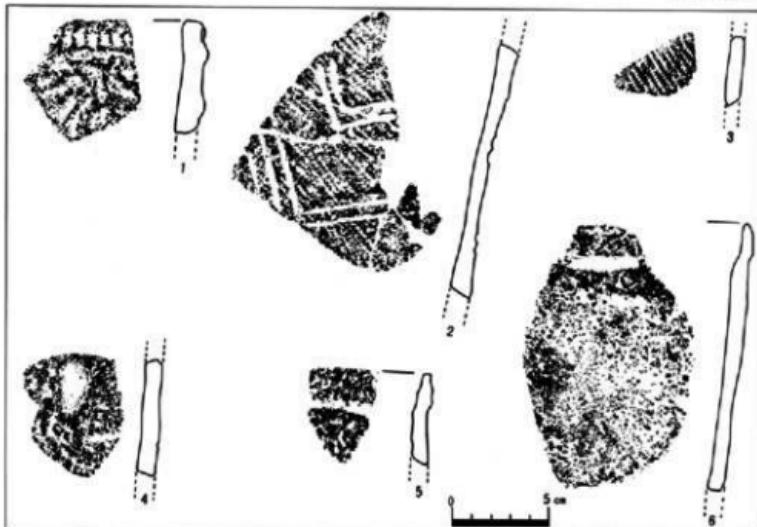
I	I層 耕作土 15cm
II	II層 暗茶褐色土 8cm
III	III層 黑褐色土 10cm
IV	IV層 褐色土

TP 8 土層柱状図

図版10 館之越遺跡



第13図 館之越遺跡土器拓影図!



第14図 館之越遺跡土器拓影図2

遺物について

テストピットから出土した土器をみると、3つのグループに分けることができる。ひとつはTP 8・9出土の土器で沈線間に交互刺突が施される土器と、縄文を地文とし押引沈線で区画した土器である(第13図1~11、図版13)。口縁部の形態から大型の波状口縁をもつ深鉢と考えられる。また、胴部に無節の結束文をもつ土器や(第13図4・5、図版13)底部付近まで引かれた平行沈線をもつ土器が見られる。

次のグループは隆線と沈線をもつ土器である(第13図15、図版13)。粘土紐を張り付けた後、隆線に沿って沈線を施し区内をさらに沈線で文様を加えている。胴上半から口縁にかけての破片であろう。

3つ目のグループは内湾した口縁部に隆線を施した土器(第13図13、図版13)、胴部に平行沈線で区画し隆線を張り付けた土器(第13図18、図版13)、また複合口縁をもちさらにその部分に燃糸压痕文をもつ土器(第14図1・5・6、図版14)等である。

以上、出土土器のなかでも特徴的な土器を中心に説明を行ったが、これらは縄文時代中期の大木7b~8a式土器に比定できよう。



遺跡遠景（北より）



T P 8 遺構検出状況

図版II 館之越遺跡



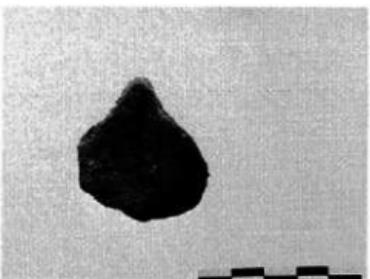
TP 14 遺構検出状況



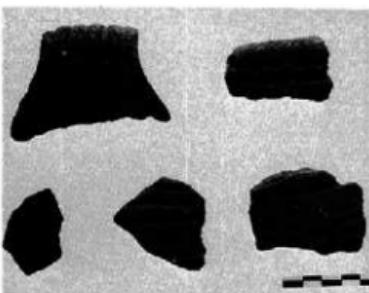
TP 19 遺構検出状況



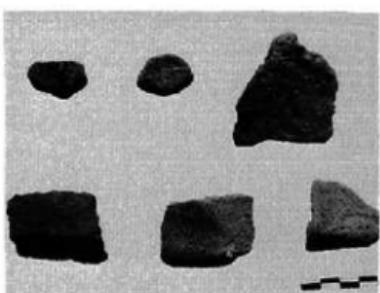
TP 1 出土遺物



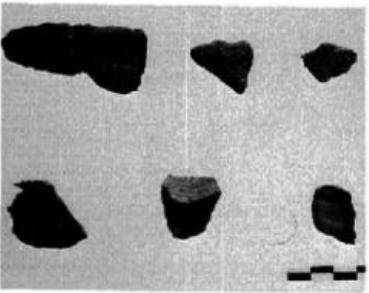
TP 4 出土遺物



TP 8 出土遺物



TP 8 出土遺物

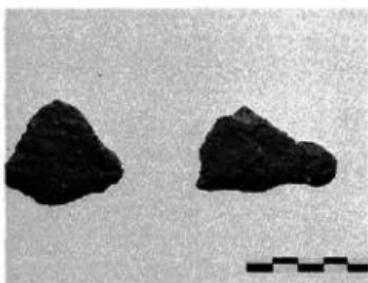


TP 9 出土遺物



TP 10 出土遺物

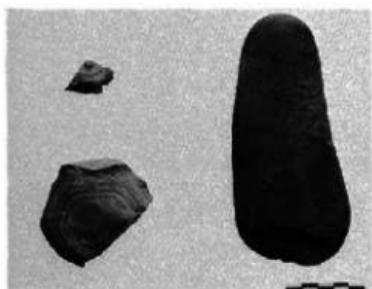
図版13 館之越遺跡出土遺物



TP 11 出土遺物



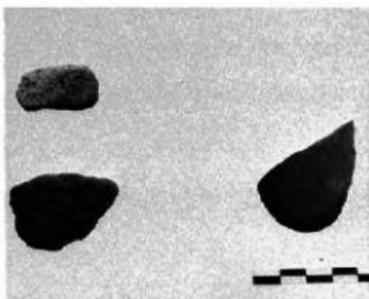
TP 14 出土遺物



TP 14 出土遺物



TP 18 出土遺物



TP 19 出土遺物

図版14 鹿之越遺跡出土遺物

調査の概要

7 源徳原館

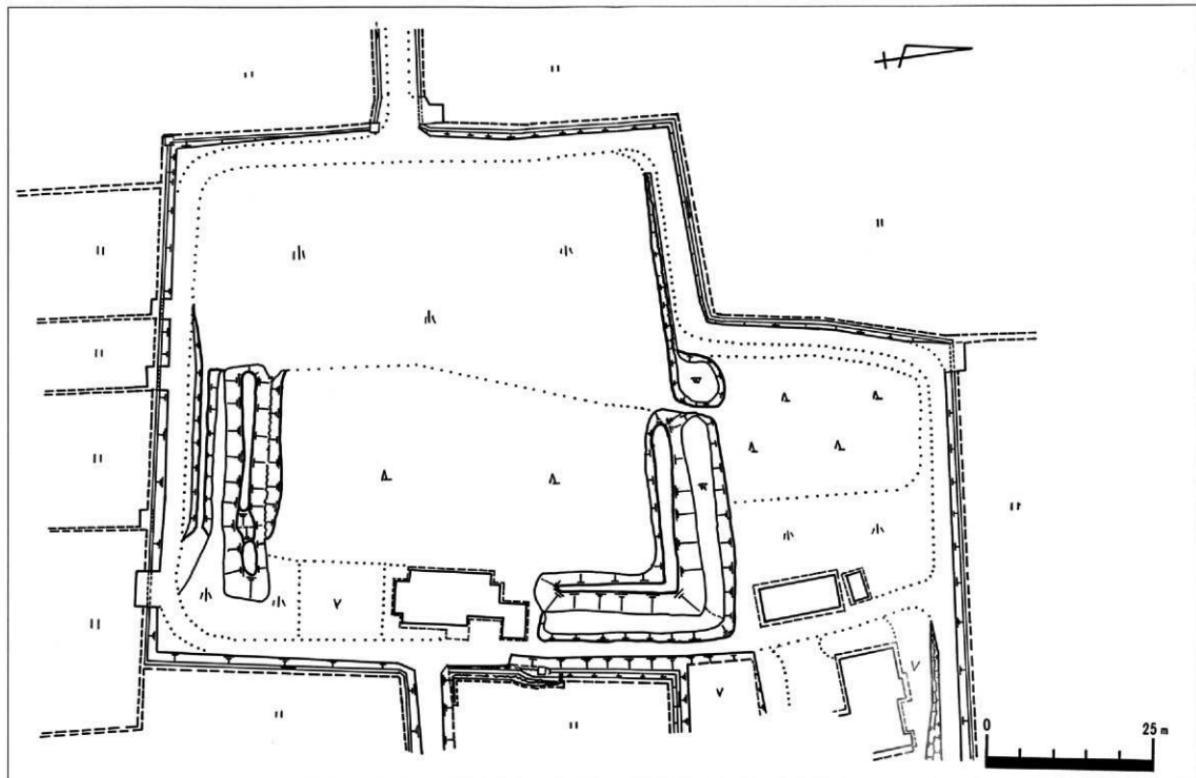
遺跡台帳整備のため実施した館跡の測量調査である。国道287号線沿いの豊田小学校から東に約600メートルのところに位置する。周辺には河井山古墳群をはじめ、今泉金山遺跡・加賀塚遺跡・蛇崩遺跡など平安時代の窯跡や茶臼館、西前遺跡(縄文時代)、北八ヶ森遺跡(旧石器時代)が点在する。

水田地帯の中央部にあるため、昭和40年代の基盤整備事業で館跡の西半分が消滅している。北側・東の一部・南側には土壘と堀跡が残っており、特に北から東側にかけてはその跡が顕著に見られる。土壘の規模は幅約6メートル、長さ約50メートル、高さ約2メートルに達し、台形状の断面を呈する。堀幅は約5メートル、長さ約50メートル、深いところで30センチメートルの水深を測る。南側は規模は小さいものの、幅約6メートル、長さ約35メートルの土壘があり、内堀状の水路跡が残っている。

本館に係る言伝え等は明かではないが、西には白川が東には最上川がそれぞれ流れ、合流地点には茶臼館(山館)がある。地形的にみても茶臼館との関わりが想起され、戦国時代には軍事的要所であったことが窺われる。



第15図 源徳原館位置図



第16図 源徳原館概要図



遠 景 (北から)



土 垒・堀 跡(東から)



土 垒・堀 跡(西から)



土 垒・堀 跡 (南東から)



土 垒・堀 跡 (北東から)



土 垒 (南から)

調査の概要

8 時 庭 館

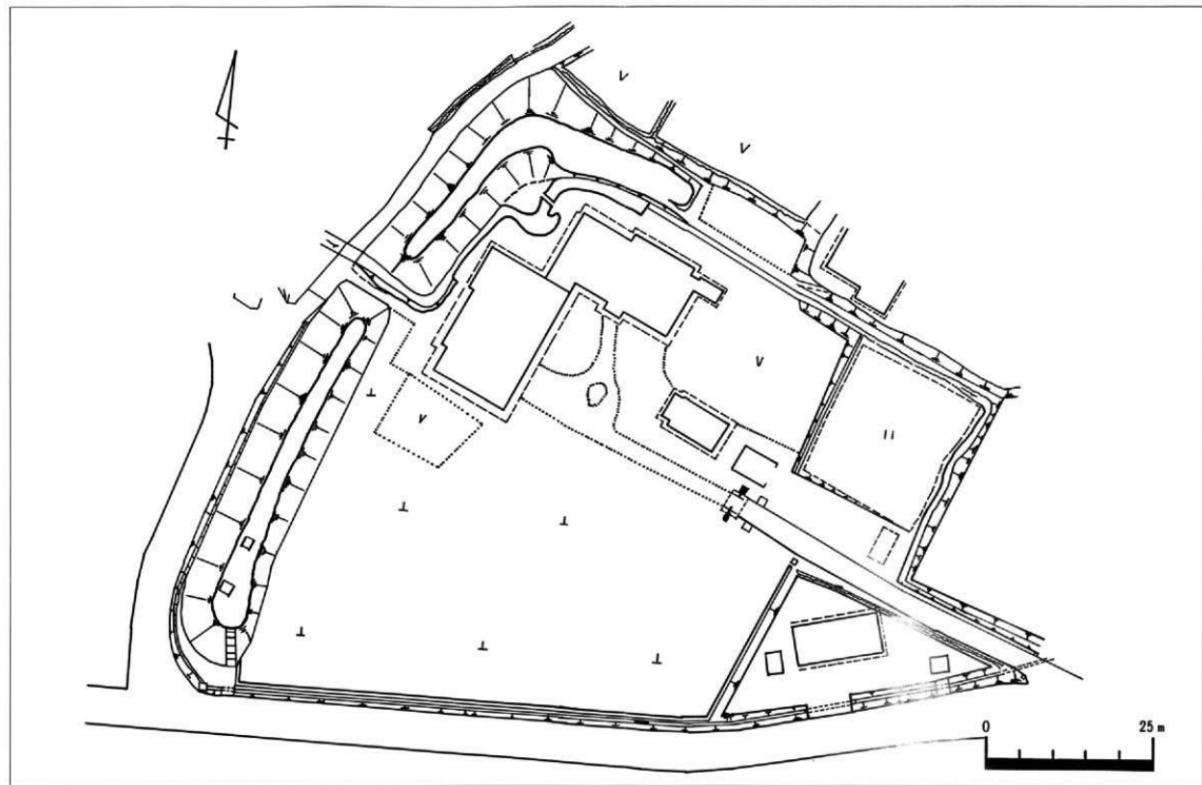
遺跡台帳整備のため実施した館跡の測量調査である。時庭館は福田川の左岸、フラー長井線時庭駅から西へ約700メートルに位置する。館跡は真言宗大雄山正法寺の敷地内にあり、現在も土壘が残っている。

正法寺の縁起は文和三年（1354年）に岩手県藤沢郡永徳寺の末寺として創立し、今日に至っているという。また、鮎貝城主鮎貝太郎が立ち去るとき、大場小十郎がゆずり受けた駕が本寺に保管されている。

寺の南側には福田川が流れ、参道の入口から「く」の字形に北東に流れを変え、館跡を囲むように流れている。また、寺の西から北にかけて「く」の字形に土壘が巡り、長さ100メートル、幅約12メートル、高さは高いところで3メートルにおよぶ箇所もある。土壘は杉や雜木が生い茂っているものの、断面が台形状を呈し、しっかりした構造である。本堂・庫裏と土壘のあいだには水が引かれ内堀の形態を呈する。福田川と土壘に囲まれた館跡である。



第17図 時 庭 館 位 置 図



第18図 時庭館概要図



遠 景 (南から)



土 垒 (南から)



土 垒 (北から)



土 垒 (南から)



土 垒 (南西から)



土 垒 (北東から)

図版16 時 庭 館

長井市埋蔵文化財調査報告書第8集
市内遺跡発掘調査報告書(1)

平成5年3月26日 印刷

平成5年3月31日 発行

発行 長井市教育委員会

山形県長井市まつの上5番1号

TEL 0238(84)2111

印刷 リササンノー企画印刷
